

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	古典に見える月
Author(s)	水谷, 智洋
Citation	プロピレア , 28 : 35 - 46
Issue Date	2022-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053433
Right	Copyright (c) 2022 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



古典に見える月

水谷 智洋

詩人で翻訳家のピーター・J・マクミラン氏は朝日新聞に、「詩歌翻遊」と題する本邦の詩歌一篇とその英訳および若干の解説から成る文章を不定期に寄稿されています。過日、2020年9月30日分の切り抜きを取り出してみたところ、芭蕉の「米くるゝ友を今宵の月の客」という句が選ばれていました。そしてその解説は、「日本は『日出づる国』の名を持つ。だが、『竹取物語』や和歌の世界を思うとき、私にはむしろ『月の国』に感じられる。今年は明日の夜が中秋だ。Zoom上であっても、親しい友と共にお酒を飲みながら、月を愛でてはどうか。たとえ離れていても私たちは同じ月の下にいる、というのは、多くの国々で、古くから愛されてきたテーマなのだから。」という文章で締めくくられていました。

そこで古典屋の思考は、むろんのこと、古代人の場合はどうであったろうか、調べてみようという方向に進みます。以下はわずかに残った本棚の書物とPC上のPerseus Greek and Latin Collectionを頼りに、前4世紀までのギリシア古典を、un-exhaustiveにあさった調査の報告です。

さて、月のギリシア語はアッティカ方言で **σελήνη** (セレーネー)、ドーリス方言では **σελάνα** (セラーナー)、アイオリス方言では **σελάννα** (セランナー) で、女性名詞です。他に暦の1ヵ月の **μήν** (メーン/男性名詞) に由来する **μήνη** (メーネー) が韻文で数回、**μηνάς** (メーナース) が1回用いられています。これらも女性名詞です。まず、順序としてホメーロスの用例から見ましよう。

(1)-a Homēros, *Ilias* 8. 555-6

ὥς δ' ὅτ' ἐν οὐρανῷ ἄστρα φαεινὴν ἀμφὶ **σελήνην** 555

φαίνεται ἄριππεπέα, ὅτε τ' ἔπλετο νήνεμος αἰθήρ·

それはちょうど、天空で照り輝く月のまわりに星々が

はっきり見えたときのよう、また高空に風も途絶えたときのよう、

トロイア勢が戦場の端のところ、一晩中、盛大に火を焚いて意気揚々と坐している、そのありさまは……という比喩のなかでの月であって、たぶん、彼らの頭上に照っていたであろう現実の月の描写ではありません。

(1)-b Homēros, *Ilias* 18. 483-4

ἐν μὲν γαῖαν ἔτευξ', ἐν δ' οὐρανόν, ἐν δὲ θάλασσαν,

ἠέλιόν τ' ἀκάμαντα **σελήνην** τε πλήθουσας,

(神は) そこに大地、天、海、

また疲れを知らぬ太陽と、満ちた月をつくった。

「そこ」は楯の表面です。武具一式を失くしたアキレウスのために、鍛冶の神ヘーパイストスが鍛えてやった大楯の表には、幾多の事象が刻み込まれているのですが、詩人はまさきに大地、天、海、太陽、月を挙げるのです。そしてその月は「満月」なのですが、後代と異なり、動詞 *πλήθω* 「満ちている」の現在分詞女性形を補って、その意を伝えています。

(1)-c Homēros, *Ilias* 19. 373-4

αὐτὰρ ἔπειτα σάκος μέγα τε στιβαρόν τε

εἴλετο, τοῦ δ' ἀπάνευθε σέλας γένετ' ἠύτε **μήνης**.

さて、その次に大きく頑丈な楯をつかむと、

そこから明るい光が遠くまできらめきわたった、月のそれのように。

主語は、もちろん、アキレウス。上記 b の大楯を手にしたときの描写です。

(1)-d Homēros, *Ilias* 23. 454-5

ὄς τὸ μὲν ἄλλο τόσον φοῖνιξ ἦν, ἐν δὲ μετώπῳ
λευκὸν σῆμα τέτυκτο περίτροχον ἤυτε μῆνη. 455

それは他の部分こそすっきり栗毛だったが、額にだけ、
白くて円いしるしがついていた、月のような。

競馬に参加している馬どものなかで先頭を駆けるのは、イードメネウス（クレーテー勢の大將）の見るところ、テューデウスの子ディオメデーヌ（アルゴス勢の大將）の馬でした。その額の白い月型がひときわ目をひくというわけ
です。

(1)-e Homēros, *Odysseia* 4. 45-6

ὥς τε γὰρ ἠελίου αἴγλη πέλεν ἠὲ σελήνης 45
δῶμα καθ' ὑπερεφές Μενελάου κυδαλίμοιο.

というのも、太陽はたまた月のそのような光が
名高いメネラーオスの高屋根の館をつつんでいたからだ。

ピュロスの王ネストールの子ペイストラトスの案内で、オデュッセウスの子テレーマコスがスパルテーの王メネラーオスの居城に向かいます。そしてその館を眺めて感嘆するという場面です。ここでも月光は、館の美しさのたんなる形容辞として挙げられているにすぎません。たぶん、月光がある時刻にある人物その他を照らすという状景は、英雄叙事詩の伝統的レパトリーの外にあったのではないのでしょうか。

もうひとりの叙事詩人ヘシオドスの『神々の誕生』を見てみましょう。ここではじめて月は女神として歌われています。

(2) Hēsiodos, *Theogonia* 371-4

Θεία δ' Ἡελίον τε μέγαν λαμπράν τε Σελήνην
Ἥθ' ἦ πάντεσσιν ἐπιχθονίοισι φαίνει
ἀθανάτοισι τε θεοῖσι τοὶ οὐρανὸν εὐρὸν ἔχουσι,

γείναθ' ὑποδηθεῖσ' Ὑπερίονος ἐν φιλότῃτι.

またティアーは大いなるエーエリオス（太陽）と輝くセレーネー（月）とエーオース（曙）を産んだ。彼女（曙）は地上のすべての者に輝きを与え、また広い天空を領する不死の神々にも輝きを与える。

ティアーはヒュペリーオーンの愛に打ち負かされたのだ。

ティアーとヒュペリーオンはともにティーターン族で、姉弟（？）で太陽神、月神、曙の女神をもうけたというのです。

次に自然哲学者たちの発言をさぐってみましょう。引用はすべて3世紀のディオゲネース・ラーエルティオス（以下 D. L. と略記）『哲学者列伝』から採っています。

(3) Pythagoras (前 580?-?500), D. L. 8. 1. 27

ἥλιον τε καὶ **σελήνην** καὶ τοὺς ἄλλους ἀστέρας εἶναι θεούς: ἐπικρατεῖν γὰρ τὸ θερμὸν ἐν αὐτοῖς, ὅπερ ἐστὶ ζωῆς αἴτιον. τὴν τε **σελήνην** λάμψεσθαι ὑφ' ἡλίου.

また、太陽や、月や、その他の星々は神である。というのは、それらのものにおいては熱が支配しており、そして熱こそが生命の原因だからである。また、月は太陽によって輝いているのである。¹⁾

(4) Empedoklēs (前 495?-?435), D. L. 8. 2. 27

τὸν μὲν ἥλιόν φησι (sc. Ἐμπεδοκλήης) πυρὸς ἄθροισμα μέγα καὶ τῆς **σελήνης** μείζω: τὴν δὲ σελήνην δισκοειδῆ,

また彼は、太陽は火の巨大な集積物であって、月よりも大きいと言っている。そして月は円盤状のものであると。²⁾

7 賢人のひとりにも数えられるソローン（前 640? - ?559）の主張には **σελήνη** の字が入ったものがあります。

(5)-a Solōn, D. L. 1. 2. 59

ἡξιώσέ τε Αθηναίους τὰς ἡμέρας κατὰ **σελήνην** ἄγειν.
なお彼は、アテナイ人に太陰暦を採用するよう要望した。³⁾

太陰暦が出たついでに、もう 2 箇所引いておきます。

(5)-b Solōn, D. L. 1. 2. 58

πρῶτος δὲ Σόλων τὴν τριακάδα ἔνιη καὶ νέαν ὀνόμασε.
ソロンは月の第 30 日を「旧と新の日」と呼んだ最初の人であり、⁴⁾

(6) Thalēs, D. L. 1. 1. 24

πρῶτος δὲ καὶ τὴν ὑστάτην ἡμέραν τοῦ μηνὸς τριακάδα εἶπε.
また、ひと月の最後の日を「第 30 日」と呼んだのは彼（タレース）が最初であり、⁵⁾

タレースは太陰暦のひと月を 30 日と数えたのであり、ソロンはその日を「旧と新の日」と呼んだのだと解しておきます。

次は抒情詩人です。アルクマーンは前 7 世紀のスパルターの人、サッポーは前 600 年頃に活躍したレズボス島の女性です。ピンダロス（前 518? - ?438）は、全ギリシアの競技会での勝利者を称える合唱隊歌を多数残しました。ティモテウス（前 450? - ?360）はミーレートス出身の詩人で音楽家。ピンダロス以外はいずれも断片です。

(7) Alkman, P. M. G. 57⁶⁾

οἶα Διὸς θυγάτηρ Ἔρσα τράφει
καὶ **Σελάνας**
たとえばゼウスと月神の娘たる「露」が
はぐく
育むようなものども

この断片を伝えているプルータルコス Πλουτάρχος (46? - ?120) は『食卓歓談集』 Συμποσιακά (lat. *Quaestiones Convivales*) 659 b でこう言っています。ὥς που καὶ Ἀλκμῶν ὁ μελοποιὸς αἰνιτιτόμενος τὴν δρόσον ἀέρος θυγατέρα καὶ **σελήνης**。 「抒情詩人アルクマーンもどこかで謎めかした物言いで露を空気と月の娘と言っているように」。たしかに、詩人の言う「ゼウス」は大神ではなく、空気と理解するほうが、地上に下りる「露」を容易に説明するようです。

(8)-a Sapphō, P. L. F. 34 ⁷⁾

ἄστερες μὲν ἀμφὶ κάλαν **σελάνναν**
ἄψ ἀπυκρύπτοισι φάννον εἶδος,
ὄπποτα πλήθοισα μάλιστα λάμπη
γᾶν < ἐπὶ παῖσαν >
星はあきらかな 月のあたりに
かがやいた 姿をひそめる、
十五夜の 銀のひかりが
陸おかにあまねく 照りわたるとき。 ⁸⁾

(8)-b Sapphō, P. L. F. 96. 6-14

νῦν δὲ Λύδαισιν ἐμπρέπεται γυναί-
κεσσιν ὡς ποτ' ἀελίῳ
δύντος ἅ βροδοδάκτυλος **σελάννα**

πάντα περρέχοισ' ἄστρα· φάος δ' ἐπί-
σχει θάλασσαν ἐπ' ἄλμύραν 10
ἴσως καὶ πολυανθέμοις ἀρούραϊς·

ἃ δ' ἐέρσα κάλα κέχνηται τεθά-
λαισι δὲ βρόδα κάπαλ' ἄν-
θρυσκα καὶ μελίλωτος ἀνθεμώδης·
その人、今はリュウディアのおみならの間に
いちじるしく顕れたまう、

そのさま宛かも太陽の
 没りしあと、薔薇の指もたす月よみ、
 あらゆる星々を傍えに從うるがごと、
 光輝を 潮づく海、あるはまた花々の咲みだれる野に
 差しかくれば、
 露きよらかに 降りて地に布き、
 花うばら、またやさしきアントリュスカ、
 さては花の盛りの蜜蓮華など 咲きこぼる。9)

「その人」の名は Ἄτθις (Atthis) 「アッティス」。サッポーはアッティスを慰めます。あなたが想いを寄せていたあの乙女は、いまリューディアへ行ってしまいましたが、あなたのことを忘れるはずがありませんよ、と。そして乙女の美しさを比喩をふんだんに駆使してほめたたえるのです。

この箇所(8)の 8 行目の βροδοδάκτυλος 「薔薇の指もたす」は、ホメーロスでは常に Ἡώς 「曙」にかかるあまりにも有名な枕言葉ですので、しばしば誤用として斥けられるのですが、私は「月」にかけてもおかしくはない、とあえて擁護しておきます。その枕言葉につづく「月よみ」は「つくよみ(月読み)」とも言い、古語で「月神」。「アントリュスカ」はパセリに似た葉のセリ科の香草です。

ところで、David A. Campbell は、一見、夜空の月と星々のことを素直に歌っているかに思われる先の断片 34 について、この詩もまた、断片 96 同様、美しさでは同輩に抜きん出たひとりの少女のことを語っているのではないかと示唆していますが¹⁰⁾、さもありません、と私も思います。

(8)-c P. M. G. Adespotia 976

δέδουκε μὲν ἅ σελάννα
 καὶ Πληιάδες· μέσαι δὲ
 νύκτες, παρὰ δ' ἔρχεθ' ὥρα,
 ἔγω δὲ μόνα καθεύδω.
 月は入り
 すばるも落ちて
 夜はいま

(10) Timotheus, *P. M. G.* 803

διὰ κυάνεον πόλον ἄστρον

διὰ τ' ὠκυτόκοιο **σελάνας**.

星々を散りばめた暗い大空を通じて、
またお産を軽くしてくれる月を通じて。

ここでは月の女神は、女性の性生活を司るオリュンポスの 12 神に数えられる女神アルテミス Artemis と同一視されているようです。ちなみに、悲劇詩人アイスキュロス（前 525? - 456）の断片 170 が、アルテミスとセレーネーを同一視する最古の文献の由です¹⁵⁾。

2 人の歴史家の著作からもひろってみましょう。ひとは東方諸国の歴史・伝統からペルシア戦争その他を叙述した「歴史の父」ヘロドトス Hērodotos（前 484? - ?425）、もうひとはペロポネネーソス戦争史を著して、「学問的歴史の父」と称されるトゥーキューディデース Thukydīdēs（前 460? - ?400）です。

(11) ヘロドトス『歴史』巻 6. 106 節および 120 節

スパルタ側はアテナイを救援することに決めたのはあったが、慣法を破ることを欲しなかったために、即座にこれを実行することができなかった。というのは、たまたまこの日が月の 9 日目に当っており、兵を動かすには月齢が満ちるまで待たねばならぬから、9 日には出征できないと彼らはいったのである。¹⁶⁾

さてスパルタ兵 2 千が満月の後アテナイに到着した。戦闘に遅れまいと必死の強行軍を続けたので、スパルタを発って 3 日目にはアッティカの土を踏んだのである。合戦には間に合わなかったが、ペルシャ人の姿を見たという願望に駆られ、マラトンに赴いてそれを見た。そうして後アテナイ人の勇氣とその武功を讃えて帰国して行ったのである。¹⁷⁾

かの有名な前 490 年のマラトーン¹⁷の戦いのときのエピソードです。ペルシア軍の来襲に際してアテナイは使節を送ってスパルテーの救援を求めました。それに対する返答が 106 節です。「月齢が満ちるまで」の原文は μή οὐ πλήρεος ἐόντος τοῦ κύκλου (sc. τῆς σελήνης) 「(月の) 円が満ちるまで」です。また、なぜその日まで待たねばならないかについては、松平先生の注 (328 頁) を引いておきます。「スパルタのカルネイオス月 (……今日の 8 月後半から 9 月前半に当る) の 7 日から 15 日に至る 9 日間は、例年アポロンを祭神とするカルネイア祭が営まれたためである。」

120 節の「満月の後」の原文は μετὰ τὴν πανσέληνον. **παν-σέληνος** あるいは **πασ-σέληνος** は形容詞ですから、ὄραν のような名詞が了解されていましょう。

(12)-a Thukydides 2. 28. 1

Τοῦ δ' αὐτοῦ θέρους νομηνία κατὰ σελήνην, ὥσπερ καὶ μόνον δοκεῖ εἶναι γίνεσθαι δυνατόν, ὃ ἥλιος ἐξέλιπε μετὰ μεσημβρίαν καὶ πάλιν ἀνεπληρώθη, γενόμενος μνηοειδῆς καὶ ἀστέρων τινῶν ἐκφανέντων.

同夏、新月の頃 (しか起こり得ないとされているように)、午過ぎの時刻に日輪が欠けて三日月形となり、天空には幾つかの星さえ認められたが、やがて再び日輪は円に復した。¹⁸⁾

「同夏」というのは戦争が始まった前 431 年の夏。久保先生の訳注 (390 頁) によれば、この日蝕は 8 月 3 日 5 時 22 分に起きたといます。νομηνία (< νεομηνία) は「(暦の) 1 日」^{ついで}、νομηνία κατὰ σελήνην で「太陰暦の 1 日」。日蝕は新月のときにしか起きないという理屈は、大枝史郎・文、佐藤みき・絵『月の満ちかけ絵本』(あすなろ書房、2012) によって教わりました。

(12)-b Thukydides 7. 50. 4

καὶ μελλόντων αὐτῶν, ἐπειδὴ ἐτοῖμα, ἀποπλεῖν ἢ σελήνη ἐκλείπει:

ἐτύγχανε γὰρ πασσέληνος οὖσα,

今にも船出という瞬間になって、月蝕が起こった。偶々これは満月の夜であったからである。¹⁹⁾

訳注（445頁）によれば、これは前413年8月27日のこと。月蝕——この場合は「部分」——は満月のときに起きるという理屈も、上述の『絵本』に教わりました。こうした天文、気象、地震など異変は、もちろん、多くの人々には不吉な事象と受け取られたにちがひありません。

—つづく—

注

- 1) 訳文は加来先生のもので。加来彰俊訳『ディオゲネス・ラエルティオス著ギリシア哲学者列伝（下）』（岩波文庫、1994）、32頁より引用。
- 2) 同上、72頁。
- 3) 加来訳『ギリシア哲学者列伝（上）』（岩波文庫、1984）、56頁より引用。
- 4) 同上、55頁。
- 5) 同上、30頁。
- 6) *P. M. G.* は D. Page (ed.), *Poetarum Melici Graeci* (Oxford, 1962)の略号です。
- 7) *P. L. F.* は E. Lobel & D. Page (edd.), *Poetarum Lesbianum Fragmenta* (Oxford, 1955)の略号です。なお、David A. Campbell (ed. & tr.) *Greek Lyric III* (The Loeb Classical Library, 1988) も同じ断片番号を使っています。
- 8) 邦訳は呉茂一先生のもので。『世界名詩集大成 ① 古代・中世』（平凡社、1960）、51頁より引用。
- 9) 同上、52頁。
- 10) Davis A. Campbell, *Greek Lyric Poetry, A Selection* (London & New York, 1967), p. 273.
- 11) 注9) に同じ。
- 12) Campbell, *Greek Lyric II* (注7), pp. 170-3.
- 13) 邦訳は久保正彰先生のもので。『世界名詩集大成 ① 古代・中世』（注8）、67頁より引用。
- 14) 同上、80頁。
- 15) Robert C. T. Parker, s. v. Selene, in *The Oxford Classical Dictionary* (3rd ed., 1996), p. 1379.

16) 訳文は松平先生のもので。松平千秋訳『ヘロドトス 歴史 中』（岩波文庫、1972）、260頁より引用。

17) 同上、269頁。

18) 訳文は久保先生のもので。久保正彰訳『トゥーキュディデース 戦史上』（岩波文庫、1966）、219頁より引用。

19) 久保訳『戦史 下』（岩波文庫、1967）、198頁より引用。